

お米のはなし

お米や稲に関するちょっとした情報・豆知識を専門家が綴る「お米のはなし」の第14弾をお届けします。

(シリーズ担当：R. I.)

14. 稲作の日本への伝来

まず、①日本の縄文時代には既に稲作があったという説と、②縄文稲作はなく、日本の稲作は弥生時代から始まったという説、の2つの考えがあることを覚えておきましょう。

考古学者の多くは、縄文時代の遺跡からは水田跡も農具も発見されていないので、縄文時代にはまだ稲作が無かったと主張しています（つまり②の説をとります）。

一方、縄文時代それも前期には既に稲作が行われていたと、①説を主張する研究者は、6000年前と推定される朝寝鼻貝塚（岡山市）の遺跡から、イネのプラント・オパールが見つかったこと、同じく彦崎貝塚（岡山市）の縄文時代前期（約6000年前）の地層からも、イネのプラント・オパールが大量に見つかったことをその論拠としています。また、水田跡が見つかっていない点については、焼き畑のように陸稲栽培を想定すれば、水田跡が無くても問題にはならず、播種のための穴を開ける堀棒さえあれば栽培できるので、特別に農具は必要なかったと考えています。

これまで、日本への稲作の渡来には3つのルートがあると言われてきました。すなわち、
1) 朝鮮半島経由説：これには、①華北から陸伝いに北朝鮮を経由し、朝鮮半島を縦断した後、対馬海峡を渡って北九州に渡来したルート（右図①）、②華北から山東半島を経て、黄海を渡り朝鮮半島の南西海岸に伝搬し、対馬海峡を渡って北九州に渡来したルート（右図②）の2つがあります。

2) 江南説（直接ルート）：華南の長江下流域から東シナ海を渡って、直接朝鮮半島南部および北九州にほぼ同時に伝搬したルートです（右図③）。

3) 南方経由説：華南から台湾、琉球諸島、南諸島を経て、南九州に達する南回りのルートです（右図④）。これは、柳田国男が提唱した「海上の道」に当たります。



図 14-1 イネの来た道 4つのルート
(出典) 安田喜憲「環境考古学事始—日本列島2万年」(NHK ブックス 365)、NHK 出版、1980

考古学者の多くは、1) 朝鮮半島経由説を取ります。日本には、中国から朝鮮半島を経て、多くの文化が渡来したので、水田稲作技術もそれと同じルートによったと考えるのです。この内、①の北朝鮮を経由するルートは、稲が冷涼な気候の北朝鮮で栽培され、そこから南下

したとは考え難く、また北朝鮮には古い稲作の遺跡も見つかっていないので、1) 説では、②の朝鮮半島南西部を経て渡来したとする方が妥当と考えられます。

また、3) 南方経由説も、琉球・沖縄や南西諸島には古い時代の稲作に関する遺跡が見つかっていないので、大半は否定的です。

一方、安藤廣太郎博士は、稲作が長江の南、江南地方から日本列島に伝来したと考えました。その根拠として、①中国の先住民族であるミャオ族（苗族）が長江沿岸や華南一体に住み、野生種のイネを栽培していた、②稲（ine）の呼称から、共通する発音 n をする呉国（現中国江南； nuan）、朝鮮南部（ narak）、安南（現ベトナム； nep）と関係が深いと思われる、③江南地方は日本に近く、沖合を海流が東上している、の 3 点を挙げています（柳田・安藤・盛永他「稲の日本史」（上下）筑摩叢書、筑摩書房、1969）。これは現在でも十分通用する卓見です。

中国、朝鮮半島、日本列島の水稲在来品種 250 種の SSR*多型の分析から、8 遺伝子（a～h）が見つかります。中国には 8 遺伝子全てが存在し、朝鮮には b を除く 7 遺伝子が存在するのに、日本には a と b の 2 遺伝子しか見つかりません。a 遺伝子は中国には高頻度で分布していませんが、朝鮮半島と日本には高い頻度で分布しており、朝鮮半島を経てきたと推測できます。一方、b 遺伝子は朝鮮半島の在来品種には見当たらず、中国大陸から直接日本に達するルートを経てきたと思われれます。つまり、水稲と水田稲作技術は、朝鮮経由と中国から直接の 2 ルートで渡来したのです（佐藤洋一郎「稲の日本史」、角川ソフィア文庫、2018）。

*DNA の短い配列 (Simple Sequence) の繰り返し (Repeat) のこと。その反復回数が個体や系統・品種によって異なるので、それらの識別に用いられる。

さらに、弥生時代中期（約 2100～2200 年前）の唐古・鍵（からこ・かぎ）遺跡（奈良県磯城郡）と池上・曾根（いけがみ・そね）遺跡（大阪府和泉市・泉大津市）の炭化米からも、この b 遺伝子が発見されています。つまり 2000 年前には、中国大陸から b 遺伝子を含む水稲が、既に近畿にも渡来していたのです（佐藤、前掲）。

縄文稲作は、縄文前期以来 3000 年にわたって、焼畑稲作か低湿地を利用した水陸未分化の粗放的に栽培された稲作でした。その稲は熱帯ジャポニカであったと思われれます。一方、日本最古の水田跡が見つかった菜畑遺跡では、水田稲作の技術を取り入れた我が国最初の稲作であったと考えられます。その稲は温帯ジャポニカであり、現在の稲作と同じ種類の稲が用いられていたようです（佐藤、前掲）。

しかし、池橋宏博士は、その著「稲作の起源」（講談社、2007 年）の第 7 章 2 「縄文農耕の証拠をどう見るか」において、①縄文土器のイネモミ跡は疑問である、②プラント・オパールおよび花粉分析によるイネの検出をどう見るか、③縄文時代に畑作農耕の可能性はない、④縄文農耕の考古学的証拠は、⑤熱帯ジャポニカの想定は正しいか、と疑問点を挙げています。①では、育種家として長年稲を見てきた経験から、土器に記された圧痕は、イネモミとは形が違っている、②では、植物遺体の痕跡や栽培の跡がないので理解できない、③では、東アジアの湿潤・多雨な条件では、畑作や焼畑は水田稲作に比べられるような「農耕」であったと見ることはできない、④では、耕作に使う道具類がなくても、臼や杵は原始的な穀物栽培には不可欠であり、銅鐸の絵にもある農耕のシンボルである、⑤では、生育期間が長く、茎が太く根が長いといった畑で栽培される熱帯ジャポニカの形質に正確に対応する一群の DNA 標識を見出して、それらが遺跡から出るイネには存在し、現在のイネにはないことを証明しなければならない、としています。

この問題、これからもまだ議論は続きます。

次回は、Wild Rice は「イネ」ではない と題してお話します。お楽しみに。

発行:(公社)国際農林業協働協会(JAICAF)
〒107-0052 東京都港区赤坂 8 丁目 10-39 赤坂 KSA ビル 3 階

JAICAF ジェイカフ